果て遠き丘

三浦綾子

果て遠き丘

三浦綾子

果て遠き丘

一九七七年六月二五日　初版発行
一九七七年十月三〇日　六版発行

定　価　七八〇円

著　者　三浦綾子

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一

印刷所　共同印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1977 A. MIURA　　Printed in Japan

0093―772093―3041

目

次

春の日 …… 7
影法師 …… 40
蛙の声 …… 64
蔓バラ …… 90
起伏 …… 107
花火 …… 116
爆音 …… 129
渦巻 …… 149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

軌跡……175
変貌……201
雪びさし……223
揺り椅子……253
寒風……278
ザラメ雪……306
断線……336

装画　原　叶人
装丁　浅利佳典

果て遠き丘

春の日

一

五月も十日に近い日曜の午後。

五分咲きの山桜が、初々しく咲く児童公園の前を過ぎて間もなく、藤戸恵理子は小又川の畔に出た。川といっても、幅一メートルほどの流れで、それでも両岸の間は十メートル余りある。五月の青い空を映して、川はきらめきながら流れている。

この川を隔てた向こうは、一万五千坪ほどの工場地帯で、旭川木工団地と呼ばれている地域だ。家具・建具を製作する工場が十五、六、それに附帯する倉庫、平家よりも高く積まれた乾燥材などの間に、寮や住宅も散在する。

対岸の道路には、トラックや乗用車が幾台となく駐車し、絶えず響く機械のうなりにも、充実した活気がみなぎっている。

が、恵理子の立つ、川一つ隔てたこの道には、いま、車はおろか、人影もない。川に向かって、小ぎれいな住宅の、赤や青の屋根屋根が、途切れ勝ちにひっそりと並んでいるばかりだ。川を境に、静と動の世界がある。それが若い恵理子の心を惹く。

歩きながら恵理子は、切れ長な黒目勝ちの目を上げて、行く手の畔に立つ数本のイタリヤポプラを見た。道の上に大きく枝を張り出したポプラの新芽が、けぶるように美しい。

あのポプラの右手に、恵理子の家があるのだ。

恵理子は土手の端の柔らかいよもぎをちぎって、形のいい鼻に近づける。よもぎの新鮮な、鋭い香りが恵理子は好きだ。恵理子はよもぎを手に持ったまま、ゆっくりと歩いて行く。買物袋の中には、頼まれもののスーツの生地がはいっている。恵理子は洋裁で家計を助けているのだ。

イタリヤポプラの下までくると、恵理子はポプラの幹によりかかって、まだ真っ白い大雪山を眺めた。透明な青空の下に、大雪山の雪は新雪のように純白に見えた。街から帰ってくる時々、恵理子はこうして、そのすらりとした肢体をポプラの幹にもたせて、大雪山を眺める。

と、そのとき、恵理子は誰かの視線を感じた。ポプラから離れて、ふと対岸を見ると、タンポポの群れ咲く岸に腰をおろしてじっとこちらを見ている青年があった。

十メートル離れたこちらからも、その眉は秀でて見えた。白いワイシャツの姿が清潔な印象を与えた。

青年はギターを膝に抱え、じっと恵理子を凝視していた。恵理子はなぜか、いまだかつてないときめきを覚えた。が、恵理子が視線をそらす前に、青年の視線がそれた。恵理子は、その青年の横顔に目を当ててから、ポプラのそばを離れた。

「茶道教授　藤戸ツネ」と書いた看板のかかっている黒塀の門をはいるとき、恵理子はふり返らずにはいられなかった。再び青年が恵理子を見つめていた。恵理子は思い切って会釈をした。青年が軽く手をあげた。ただそれだけのことだった。が、恵理子の胸は急にふくらんだ。その青年には、いままで誰にも見たことのない何かがあった。それが何であるかを、恵理子は正確に言いあらわすことはできなかった。

玄関までの、五メートルほどの道の両側に、ピンクの芝桜が咲き、庭のつつじもいまが盛りだ。草一本生えていないのは、母の保子の手入れだ。

玄関の格子戸をあける前に、恵理子はいつものように、服のちりを手で払い落とす。今朝着替えたばかりの、薄いグリーンのスーツが、恵理子によく似合う。バッグから紙を出し、恵理子は靴を拭く。そして、敷かれてある靴拭いで、靴の底を充分に拭う。万一これを忘れると、たちまち母に、

「汚いわねえ」

と、言いようもない嫌悪をこめた声音で叱られるのだ。

静かに戸をあける。鈴がリンリンと澄んだ音を立てた。

靴は一ミリの隙もないように、きちっと揃えてあがる。いつものことながら、恵理子は、母と別れた父の橋宮容一の心情がわかるような気がするのだ。

十二畳の居間に、母の保子はテレビを見ていた。

「ただいま」

声が聞こえたのか、聞こえないのか、保子はふり返りもしない。淡いみどりの博多帯を、粋に結んだ保子は、横ずわりになっていた。そのふっくらとした腰の肉づきが、四十八の年齢より、四つ五つ若く見せている。保子は軽く口をあけ、まばたきもせずにテレビを見ている。あまり高くも低くもない鼻にも、片手を畳についたその指のひらき具合にも、女らしさが漂っている。

テレビの中では、若い女性が海べに立って、去って行く男の姿を見つめている。その女性の白い着物の裾が風にゆれ、目には涙がいっぱいにたたえられている。男の足跡は打ち寄せる波にかき消されていく。

「お母さん、ただいま」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「あら、帰ってきたの」
保子はすっと手を伸ばして、テレビのスイッチを切った。時々保子はこんなことをする。
「なんにもおもしろいものがないわね、日曜は」
たったいま、自分では熱心に見ていながら、保子はいう。その母の気持ちも、恵理子にはわかるような気がするのだ。たぶんこのドラマの中には、娘には知られたくない何かが隠されていたのだろうと、恵理子は察した。
「帰ってきて、うがいをしたの？　手は？」
「まだよ」
「汚いわねえ」
恵理子は首をすくめながら、洗面所に行った。何をいわれても、今日の恵理子にはあまり気にならない。いましがた自分を見つめていた青年の顔が、恵理子の胸を明るくしているのだ。蛇口をひねって、ていねいに手を洗い、口をすすぎながら、恵理子はまた父のことを思った。
母が父と別れたのは、父に女ができたからだと聞かされていた。もう十年も前の、恵理子が十三のときだった。ようやく少女になりかけたその頃の恵理子は、少女の潔癖さで、父を許すことができなかった。母につれられて、恵理子は父と妹の香也子と別れた。
が、近ごろは、なぜか時おり父がふと懐かしくなる。母の潔癖は異常で、小さいときから母にしつけられて育った恵理子でさえ、閉口することが幾度もあった。
母の保子は、朝起きるとすぐに掃除をはじめた。そのときに着た着物を、そっくり着替えなければ食事の用意をしない。台所はいつも、モデルルームのキッチンのように、ぴかぴかに磨き立てられていた。口の悪い従兄の小山田整がいったことがある。
「ぼくはね、この家の台所で、朝晩食事の用意がされているということを、絶対信じないね。この台所はね、恵理ちゃん、まだ一度も使われたことがない台所だよ」
客が帰ったあと、母はその客のさわったとおぼしきものいっさいの消毒をする。玄関の戸、建具の取っ手、湯のみ茶碗、茶卓、座布団、歩いた畳、いっさいがその対象となる。
いま思うと、外から帰ってきた父が、洗面所で、家中にひびくような音を立ててうがいをしていたのは、自分がいままさしくうがいをしているぞという母への誇示と、やりばのない腹だたしさの表れだったのかもしれない。別れた父は、母とくらべて容貌は劣るが至極おっとりとした女と再婚した。親戚の女たちが、
「こんなにきれいな、働き者の奥さんの、どこが悪くて離婚したのだろう」
といっていたのを、恵理子は忘れてはいない。

恵理子は洗面所を出ると、二階の自分の部屋にあがって行った。まだあの青年が川岸にいるかどうかを確かめたかった。部屋の窓に寄ったとき、恵理子は、ハッとした。青年が若い女性と肩を並べて、川の畔を歩いて行くうしろ姿が見えたのだった。

二

同じ日。

橋宮容一は、庭のテーブルでコーヒーを飲みながら、傍の香也子をちらちらと見ていた。別れた妻の保子によく似た香也子の横顔が、今日はひどく不機嫌だ。その不機嫌の原因を測りかねて、容一は再び視線を芝生に戻す。

三百坪ほどの広い庭は、なだらかに傾斜しつつ、沢の端に至っている。築山が前庭にあり、家のうしろは、香也子の、

「ゴルフ場のような庭にしたいの」

とねがったとおりに、広々とした芝生にした。香也子はここにプールもほしいという。今年は、そのプールも造ってやろうと、容一は考えている。生みの母と別れ、姉の恵理子と別れた香也子が、容一には何かふびんでならないのだ。

沢を隔てた向かいの山が、日一日と鮮やかな芽吹きを見せてきている。萌黄色の山に白いこぶしや桜の花が咲いているのも美しい。ここ高砂台の丘の上は、しゃれたたたずまいの家が散在し、ところどころに落葉松や柏林が残っていて、別荘地のような趣がある。その中で、橋宮容一の家だけは、五百坪近い敷地を高いブロック塀でぐるりと囲い、近代的な豪奢な邸宅の構えを見せている。

正門は重々しい鉄柵の門扉に閉ざされ、人が近づくと、鎖につながれたシェパードのトニーが噛みつかんばかりに激しく吠え立てる。

「高い塀だねえ。俺はまた、刑務所かと思ったよ」

恵理子の家にも、この家にも始終現れる、例の口のわるい小山田整がいって、香也子に叱られたことがある。

「どうした。コーヒーを飲まないのかい」

むっつりと黙りこくっている香也子に、たまりかねて容一がいう。

「飲むわ」

いままでむっつりとしていた香也子が、不意にニコッと口もとにえくぼを見せる。何だ、怒っていたのではなかったのかと思ったほどに、香也子は突如として気分が変わる。

「何を考えていたんだ」

ほっとして容一は、タバコに火をつける。
「なんでもないわ。でも、とてもすてきなことよ」
「すてきなこと？　香也子がすてきなことを考えるときに、ふくれっ面になるとは、知らなかったな」
冗談めかして容一は笑う。びんのあたりに白髪の目だってきた容一は、笑うとまなじりに、二、三本のしわがより、それがひどく容一を柔和に見せた。道北に手広く取引先を持つ、大きな建材会社の社長とは見えない。
そこに、妻の扶代と章子がテラスから出てきた。章子は、後妻の扶代のつれ子で香也子より二つ年上の二十二だ。
扶代は目鼻だちのパラッとした、おっとりとした女だ。それに反して章子は、伏し目勝ちな、ひっそりとした性格である。顔だちもどことなく淋しく、その唇が描いたように形がよくぬれていなければ、若い女の子らしさがないほど地味で目だたない。それがふしぎなことに、香也子のように表情の豊かな、いきいきとした女性のそばにくると、章子の輪郭がはっきりしてくる。章子の個性が生きてくるのだ。
香也子は二人を見ると、ついと顔をそむけた。
「ねえ、あなた、どうかしら。この章子の着物？」
章子は更紗模様のモダンな柄の着物を着ている。
「おお、なかなか似合うじゃないか。今日はおめかししたな」
容一がニヤッと笑う。章子のボーイフレンドの金井政夫を、今日ははじめてわが家に呼んだのだ。金井政夫は自分で英語塾をひらき、百人ほどの塾生がいるという。章子はその塾に去年から通っていて、金井との交際がはじまったらしい。
義父の容一にニヤリと笑われて、章子は耳まで真っ赤にした。向かいの山を眺めていた香也子がふり返っていった。
「ほんとにお似合いよ、章子さん」
口に嘲笑がうかんでいる。香也子は扶代を母と呼ばず、章子を姉と呼ばない。小母さんと呼び、章子さんと呼ぶ。
「ありがと」
章子がはにかむ。
「馬子にも衣装って、ほんとうね、お父さん」
わざと香也子は無邪気にいう。
「香也子、馬子にも衣装とはね、本来は、大したことはないが、着物で引き立っている場合に使う言葉だよ」
とりなすようにいう容一に、
「そうよ、わかってるわ」
「わかっちゃいないよ。それは面と向かって人にいう言葉じゃない。自分のことをいうか、あるいは陰でいう言

葉さ」
「ああ、じゃ陰でいうわ」
香也子は椅子ごと、ぐいと扶代と章子のほうを向いた。
「ひどいわ、小母さんも章子さんも」
「あら、何のこと？　香也ちゃん」
扶代は驚いて香也子を見る。
「だってそうじゃない。同じ屋根の下に、わたしだって住んでるのよ。それなのに、いままで一度だって、彼氏ができたなんて、わたしに教えてくれたことないわ。そして、今日急に、この家につれてきますなんていわれたって……」
ぽんと容一がズボンの膝を叩いた。
「なあるほど。それで機嫌が悪かったんだね、香也子は」
「そうよ、わが子の機嫌のわるいのが何の原因かわからないなんて、お父さんも鈍感ね」
つんとする香也子に、容一はいった。
「鈍感で申しわけない。なるほど、なるほど」
容一は、扶代からそれとなく金井政夫のことは聞かされていた。だから今日の金井の来訪は、容一にとってごく自然なことだった。
「ごめんなさい、香也ちゃん」
章子はうつむいたまま、
「でも、まだおつきあいしてるっていうだけで……お知らせするほどの間柄じゃないんですもの。昨日、お父さんとお母さんに紹介してほしいっていわれて、わたしだってびっくりしたくらいなんだもの」
「あら、そう。まだ恋人ってわけじゃないの。そうなの」
不意に香也子は笑いだし、
「金井さんて、どんな方かしら。わたしにも紹介してね」
と、甘えるように、章子と扶代を見た。
「もちろんよ」
章子はうなずいた。
「ごめんなさいね、章子さん。馬子にも衣装だなんて。わたし、ちょっと怒ってたもんだから。ほんとはよく似合うわよ」
香也子は愛らしく首を傾けて見せる。ひどく素直な表情だ。
「あの、あと二十分ぐらいしたら、おみえになる筈ですけれど」
扶代が容一にいう。
「着替えか？　このままでいいだろう」
「でも、ズボンがちょっと汚れてますわ。じゃ香也ちゃんも会ってくださいね」

扶代は何のこだわりもない笑顔を見せて、容一や章子と家にはいって行った。それを見送りながら、香也子は呟いた。

「やっぱり、馬子にも衣装よ」

香也子は自分の着ているクリーム色のワンピースを眺め、この色が自分にいちばん似合うと思った。あと二十分後に章子の恋人がくる。英語塾には、若い女性も何人かは通っている筈なのに、章子という目だたぬ女性を選んだ金井という青年に、香也子は興味を持った。

「ご機嫌いかがですかな、香也子嬢」

不意に従兄の小山田整の声がした。

「つまんないわよ」

香也子は少しも驚かない表情で、ゆっくりとふり返った。

「君が、つまんないと退屈してる間も、この地上では、一分間にどれほどのできごとが起こっているか、知っているかね」

体格のいい整は、ピンクと白の縞のワイシャツの袖をたくりあげて、逞しい腕をむき出しにしている。

「またはじまった、整さんったら」

整は突如として現れ、突如として妙なことをいいだす。

「いいかい、香也子。この一分間にだよ、流れ星が、実に六千個も地球に落ちてきているんだ」

どうだ、驚いたろう、といわんばかりの顔に、

「まあ！　六千個も」

香也子は驚いて目を見張る。かわいい童女の顔になっている。

鳶が、頭上でのどかに啼きながら、すべるように沢のほうに降りて行った。

三

鳶の啼く声に、小山田整が空を見あげていった。

「鳶の舞うときは、天気が変わるんだってさ」

五月の陽に、庭の芝生が輝いている。

「整さんは、物知りね。一分間に六千も流星が地上に降りるとか、鳶が啼いたら何とやらとか」

香也子が整の目をのぞきこむように、いたずらっぽく笑う。

「それほどでもないけれどね」

「つまり、整さんは退屈してるってことね。恋人がないってことね」

「こいつ」

整が殴る真似をし、香也子が椅子を立って逃げる真似をした。芝生に香也子の影が動く。

「香也子にだって、恋人はいないじゃないか。章子ちゃんには、もうできたっていうのに……」
今度は香也子が殴る真似をし、整が逃げる真似をする。お手伝いの絹子が、コーヒーを持ってテラスから芝生に降りてきた。
「やあ、ありがとう。いま、台所に飲みに行こうと思ったところだよ」
車のセールスマンである小山田整は如才がない。
「お客さまはまだ?」
香也子が尋ねる。
「あのう、二十分ほど遅れるって、電話がありました」
絹子は、さっき香也子の父が飲んだコーヒーカップを盆の上にのせながらいう。
「まあ、二十分も遅れるって?」
細い眉がきゅっとあがる。
絹子が去ってから、整がいった。
「章子ちゃんの恋人だろう、くるのは? 遅れようと早くなろうと、香也ちゃんには関係ないだろう」
「整さんはのんき坊主ね。すべての男性は、わたしの恋人になり得る可能性があるのよ」
「まあ、そりゃそうだ。ただし、ぼくを除いてだろう」
「あら、わからないわ。わたしだって、整さんを好きになる可能性はあるし、整さんだって……」
「ぼくのほうは、香也ちゃんを恋人にする心配はないね」
「まあ、失礼。わたしってそんなに魅力がない?」
「大ありだよ。もっとも、君の姉さんの恵理ちゃんよりは落ちるがね」
整は健康な口にコーヒーカップを当てて、うまそうにコーヒーを飲んだ。
「まあ? 恵理子姉さんって、そんなに魅力的?」
「だろうな。理知的で、やさしくてきれいで……」
「もういいわ」
「怒ることはないだろう。君の姉さんのことをほめてるんだよ」
「整さん、すべての女性は、わたしのライバルに変わり得るのよ」
きっとして、香也子がいった。
「なあるほど。大変なファイトだ」
ニヤッと笑った整に、
「わたし、十ぐらいのときのお姉さんしか知らないのよ。本当に整さんのいうとおり、素敵な女性かしら」
「君って忙しい人だな。すべての男性は恋人に変わり得るし、すべての女性はライバルに変わり得る。それじゃ、心の休まるときがないだろう」
「いいえ、そう思うから、わたしには人生が楽しいの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.